

令和8年度 比治山大学
現代文化学部・健康栄養学部・短期大学部
学校推薦型選抜

基礎適性検査

受験番号	
氏 名	

解答上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み1ページから11ページまであります。
また、解答用紙は1枚です。試験開始後、すぐに中を確かめ、印刷
や枚数などに不備と思われる点があれば、手を挙げて監督者に知ら
せなさい。
2. 解答は、すべて、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. 問題冊子、解答用紙を持ち出してはいけません。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

読書によって知的発達が促進されることに関連する知見として、読書^Aによって語彙力が高まるということがある。心理学や教育学の分野において、読書量が多いほど語彙力が高いということが多くの研究によって示されている。

（a）、小学校高学年の児童を対象にした研究でも、読書量の多い子ほど語彙力が高いことが示されている。就学前の幼児を対象とした研究でも、読書量の多い子ほど語彙力が高いことが示されている。

本を読むということは、多くの言葉に触れることもある。（b）、読書によって多くの言葉に触れている子と、読書をあまりせず言葉に触れるキカイ^①の少ない子では、獲得している言葉の数が違って当然と言える。

言葉をたくさん知っていれば本を何の苦もなく読むことができるが、言葉をあまり知らなければ本を読むのに苦勞する。そこに読書と語彙力の相互作用が生じる。

つまり、よく本を読む子は、語彙力が高いため本を読むことが苦にならず、読書を楽しむことができる。それによつて、ますます語彙力が高まり、読書好きになっていく。

一方、あまり読書をしない子は、語彙力が低いため本を読むことが苦になり、あまり読書を楽しめない。その結果、なかなか語彙力が高まらず、読書嫌いになっていく。

こうして、読書を楽しみ語彙力を高めるとともにさまざまな知識・教養を身につけていく子と、あまり読書をせず語彙力が乏しく知識・教養も乏しい子に分かれていく。

もつと年少の2歳前後の幼児になると、自分で読書することはできない。その場合は、本をよく読むかどうかというより、読み聞かせをよくしてもらっているかどうかが問題となる。

読み聞かせの効果に関しても、多くの研究が行われている。そうした諸研究によれば、読み聞かせを始めた時期が早いほど、また読み聞かせの頻度^②が高いほど、語彙力が高いといった傾向がみられる。

このようにみると、独力による読書であっても、読み聞かせによる[□]な読書であっても、読書経験が語彙力を高めると言うことができる。

読書量と語彙力の関係については多くの調査研究が行われているが、幼児期から児童期の子どもを対象とした研究を

③ みても、中学生や高校生を対象とした研究をみても、大学生や大学院生を対象とした研究をみても、どの年代でもイッカンして読書量の多い者ほど語彙力が高いといった傾向が示されている。

文章を理解するには語彙力とともに読解力も求められる。言葉をたくさん知っている方が文章を理解しやすいが、文脈を読み取る力もないと文章の意味を十分理解することができない。

(c)、つぎに語彙力から読解力に話題を転じよう。じつは、読書量が多いほど読解力が高いということも、多くの調査研究によって示されている。

たとえば、心理学者の猪原敬介たちが小学校1年生から6年生までの児童を対象に④ジッシした調査において、読書時間や読書冊数、学校の図書室からの図書貸出数などから測る読書量が多いほど、語彙力も読解力も高いことが示されている。

言語学者の澤崎宏一は、大学生を対象に読書習慣と読解力についての調査を行っている。その結果をみると、子どもの頃から現在までの総読書量が文章理解力と関係していた。そして、小説などの読書量が、新聞・雑誌やマンガの読書量よりも、文章理解力と強く関係していた。

さらに澤崎は、文章ではなく単文、つまりたったひとつの文の読解力にも読書経験が関係していることを、同じく大学生を対象とした調査によって確認している。その調査では、読書経験が豊かな者ほど、ひとつの文が自然か不自然か、つまりおかしい文かどうかを正しく判断できることが明らかにになっている。

しかも、高校時代や大学時代の読書量より、小中学校時代の読書量の方が、大学生の単文の読解力に強く関係していた。

自分では本を読めない幼児期における親による読み聞かせが、子どもの読解力を高めることもわかっている。⑤幼児期から小学校中学年まで追跡調査した研究によれば、幼児期に親からよく読み聞かせをもらった子どもは、あまり読み聞かせをしてもらわなかった子どもよりも、小学校4年生になったときの読解力が高いことが示されている。

つぎに語彙力と読解力の関係についてだが、小学校2年生前期の語彙力によって2年生後期になったときの文章理解力を予測でき、さらに2年生後期の文章理解力によって3年生になったときの語彙力を予測できることを実証した研究もある。

語彙が豊かであれば文章を理解しやすく、文章を理解する力があれば、わからない単語の意味を文脈から推測することと新たな語彙を獲得していくというように、語彙力と読解力の間には相互促進的な作用が働いているということだろう。

このように読書経験が語彙力や読解力の向上につながるものが、多くの研究によって証明されている。そうしたメカニズムが、読書が知的発達を促進するということの背景に働いているといってよいだろう。

(榎本博明『読書をする子は〇〇がすごい』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 空欄(a) (c)にあてはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし同じ記号は一度しか選んではならない。

ア ゆえに イ そこで ウ しかし エ なぜなら オ たとえば

問三 波線部 A 「読書によって語彙力が高まる」とあるが、このことについて筆者はどのように述べているか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 読書によって語彙が増える傾向は確にあるものの、要因を読書だけに限定するのは早計だ。
- イ 読書量の多さが語彙力の高さに結びつく傾向は、複数の事例から確かめることができる。
- ウ 読書が語彙力を高めるかどうかは個人差が大きいため、法則として一般化するのは難しい。
- エ 読書量と語彙力との関係については人々の関心が高く、多くの研究が行われるのもうなずける。

問四 波線部 B 「読書と語彙力の相互作用が生じる」とあるが、このことによって、どのような事態になるか。次の空

欄を補うように、文章中の語句を用いて説明を完成させなさい。ただし、1 は六字以内、2 は十五字以上二十五字以内で記しなさい。

1

かどうかによって、

2

子と、そうでない子に分かれていく。

問五

空欄

にあてはまる語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 抽象的

イ 具体的

ウ 直接的

エ 間接的

問六

波線部 C 「読書量が多いほど読解力が高い」とあるが、このことに関する調査研究から分かることとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小学生を対象にした研究では、読書時間や読書冊数が多いほど、文章理解力や単文読解力が高いことが明らかにになった。

イ 子どもの頃からの総読書量が読解力と関係があり、読むジャンルにかかわらず、読書量が多いほど読解力が高い傾向にある。

ウ 子どもの頃からの読書経験が、文章理解力だけでなく、ひとつの文が自然か不自然かを正しく判断する力にも関係している。

エ 大学生の単文の読解力は小中学校時代の読書量に強い関係があり、高校時代や大学時代の読書量には関係がない。

問七 波線部 D 「語彙力と読解力の関係」とあるが、筆者はそれをどのような関係であると述べているか。次の空欄を補うように、文章中の語句を用いて説明を完成させなさい。ただし、

 は十字以内、

 は十五字以上二十五字以内で記しなさい。

語彙力が高ければ

、読解力が高ければ

というような、互いに影響しあう関係。

問八

この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 語彙力や読解力向上の要因としては、読書量だけでなく、家庭の教育方針といった外的環境も考慮する必要がある。

イ 語彙力と読解力の関係については、互いの影響関係が示唆されているに留まっており、実証的な研究はまだ行われていない。

ウ 保護者による読み聞かせは、子どもの語彙力の増加に寄与するだけでなく、その後の読解力の向上にも大きく関与している。

エ 読書量は語彙力や読解力の向上につながり、知的発達を促進する働きがあるため、学業成績の向上が期待できる。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

私は生物学者として、生命のことをいろいろと研究してきました。

理科系の研究者というのは一人前になるのにとっても時間がかかるもので、大学は理科系の学部で四年間、そのあと大学院には五年間通いました。それはほとんどが、ボロ雑巾^①のように、朝から晩までネズミを殺したり、細胞をすりつぶしたり、部屋全体がレイゾウ^②ウミたいなところにスキューアを着込んで閉じこもって、一滴ずつサンプルをとったり……、といった日々です。いまだいうブラック企業みたいな環境でずっと研究を続けて、ようやく博士号を取るんですけど、理科系の人間にとっての博士号というのは、ゴールではありませんし、終着点でもありません。むしろ出発点で、運転免許証みたいなものです。ですから、博士号をもらおうとようやく路上に出られるんですけど、路上に出たところでもともに運転できるわけではないので、そこからまた修行をしなければいけない。そして、ポストドク——正しくはポスト・ドクトラル・フェロー（Postdoctoral fellow＝博士研究員）というのですが——として、博士号を取ったあとにさらに研究をする、ということは何年も研究を続けてきました。私は、もう軽く一万匹くらいマウスを殺していると思います。生命が好きなのに、「 」^③というくらいに生命を殺めてばかりきたのです。

そうやって私は生物学、そして科学の研究に携わってきました。

さて、現在では、科学についての書籍も多く出版されています。^④巷^{ちまた}では「科学とはいったい何なのか」ということを、一般の人たちも問いますし、理科系の研究者自身もさまざまに問うています。理科系分野の研究成果というものは、あるときは顕微鏡写真、あるときは実験のデータ、また別のところでは、折れ線グラフ、あるいは数式といったように、いろいろなかたちで表されます。でも、それらは科学の成果であるとは言えるかもしれませんが、科学が目指すべき最終ゴールと言えるかというと、果たしてどうでしょうか。

私は、科学の本当のゴール、すなわち科学の出口というのは何かと問われたら、「それは言葉である」と答えるようにしています。つまり、「生命とは何か」という問いに対して、誰にでもわかる言葉——それは短い言葉ではないかもしれないですけども——で答えることができれば、それが科学の出口、生物学の出口だと思っ**B**っているのです。

生命とは何かについて、従来の理科の教科書に載っているような「DNAが二重らせん構造になっている」とか、「タ

ンパク質はアミノ酸が連結して、その配列はかくしかじかだ」といった説明は、全部そのための手続きだと言えます。それらは、生命とは何かということを解き明かすための一里塚になることはあっても、決して、まだ真の出口ではない。

私はその出口というものを、今日までずっと考え続けてきたというわけなのです。

最近、私は非常に面白い本を読みました。

傳田光洋さん^{でんだみつひろ}といって、資生堂で皮膚の研究をしている方らしいのですが、最近、何冊か著書があります。私が書店でたまたま出会ったのは、その方が書かれた『皮膚感覚と人間のこころ』（新潮選書）という本でした。本の中では、人間は皮膚を通していろいろなことを受容している、ということが説明されています。資生堂ですから皮膚の科学をしているのは当然なのかもしれないけれども、その本の主題はともかくとして、イントロのところに非常に面白いことが書かれてあったんです。

傳田さんは、滋賀県の進学校を出て、京都大学の工学部に進んだ方なんですけれども、高校時代に生物の面白い先生がいて、その先生が、あるとき、次のような試験問題を出されたのだそうです。

「生物というのは、いろんなものを食べて排せつしている。それが生命であり、生きているっていうことです。では皆さん、われわれの郷土の、この琵琶湖^{びわこ}を思い浮かべてください。琵琶湖にはたくさんさんの川が流れ込んでいます。そして、南からは川が流れ出て、大阪湾にソソいでいます。このように、琵琶湖にもいろんなものが入ってきて、いろんなものが出ていくというふうに見えます。では、問題です。琵琶湖は生命でしょうか？」

彼は、ビックリしてしまって、まともな答えを全然書けなかったそうです。それまでに習ってきた生物学の知識に照らして、「生命というのは、DNAを持っているとか、呼吸するとか、そういうことが特徴である。しかし琵琶湖には別にDNAはないから、多分生命じゃありません」と答えるのがやっとだった。でも、その問いは、彼の心の中にずっと残り続けたのです。

……というところまで読みました。

つまり、この例を使って言いたいことは、高校生だった傳田さんの答えのように、生命とは何か、と問われたときに、それが、細胞からできているとか、呼吸をしているとか、DNAがあるとか、そういう属性を並べて定義・回答するこ

とが、生命とは何かについての出口となり得るのだろうか、ということ。そうではなく、生命というものの本性——属性に対して本性という言葉が正しい言葉なのかどうかわかりませんが——を本質的に答えること。属性を並べることによって操作的に答えたり定義したりするのではなくて、その本性をがっちりつかめるような言葉で生命を語ることができたなら、それが科学の出口なのではないか、と私は思うのです。

それが答えられるということが、私にとつての「大きな絵」^{ビッグ・ピクチャー}なのです。

もちろん、実験など、科学の手續きの中で行っていることは非常に細かい作業の積み重ねなのですが、私は⑤⑥あたりとも、その「大きな絵」に少しでも近づきたいという思いを忘れたことはありません。多くの科学者は、ついつい、自分のしている細かい仕事の中で起こっていることが面白すぎて、「大きな絵」というものを忘れがちになっているのではないかと思うことがあります。

私は何とか「ビッグ・ピクチャー」を得たいと思つて、研究を続けてきたわけなんです。

(池田善昭 福岡伸一『福岡伸一、西田哲学を読む』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 二重傍線部①・②の文章中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 巷

ア 外国

イ 自国

ウ 世間

エ 地方

② 一里塚

ア 一つの段階

イ 一つの理由

ウ 一つの証拠

エ 一つの理論

問三 波線部 A 「ブラック企業みたいな環境」とあるが、これはどのような「環境」か。その説明として最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たまにしか有意義な仕事をしないような、退屈な環境。
- イ 長時間の過酷な作業が常態化している、劣悪な環境。
- ウ 上司からのハラスメントが横行する、ひどい環境。
- エ 無給で毎日働かされるような、非合法的な環境。

問四 空欄 にあてはまる語句として最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雉^きも鳴かずば撃たれまい
- イ 石橋を叩いて渡る
- ウ 一寸の虫にも五分の魂
- エ 畳の上では死ねない

問五 波線部 B 「生物学の出口」とあるが、それは何をする事だと筆者は思っているか。次の空欄を補うように、「本性」の語を用いて二十字以上三十字以内で説明しなさい。

「生命とは何か」という問いに対して、で生命を語ること。

問六 波線部 C 「まともな答えを全然書けなかった」とあるが、それはなぜか。最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 試験範囲が生物の皮膚に関するものだと思っていたのに、想定外の問題が出て、自信を失ったから。
- イ 大学進学をめざすような生徒がいらない高校の定期試験に見たこともない難問が出て、動揺したから。
- ウ 今までに習った生物学の知識ではうまく答えられない問題が高校の試験に出されて、驚いたから。
- エ 生物の教科書で学んだ知識ではなく、地元の地理に関する事柄が試験で問われて、落胆したから。

問七 波線部 D 「科学の手続き」とあるが、これはどのような「手続き」か。次の空欄を補うように、文章中から二十
五字以上三十字以内で抜き出して記しなさい。

生命というものの

という手続き。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大学入学後、筆者は大して好きでもない生命現象の研究に取り組んできたが、その過程で実験動物の生命
を粗末に扱ってきたことを深く後悔している。

イ 実験データなどを蓄積し、それを数式化するなどの研究成果をあげることによって、いずれは科学が目指
すべき最終目標に到達することができる。

ウ 『皮膚感覚と人間のこころ』という傳田光洋の著書に出会った筆者は、その本の主題である「こころ」に
ついての洞察に対してただならぬ興味を抱いた。

エ 科学者の多くは自分が研究している細かい事柄に夢中になるあまり、科学とは何かという巨視的な問題に
答える重要性を忘れてしまう傾向がある。